

## 能 一 篇 (咸陽宮)

前 田 正 民

世阿弥はその著「能作者」の最初に、「一、先づ種・作・書三道より出でたり。一に能の種を知る事、二に能を作る事、三に能を書く事なり。本説の種をよくよく案得して、序・破・急の三昧を五段に作りなして、さて、詞を集めて、曲を附けて書き連ぬるなり。」と言っている。即ち第一に素材を求めて書き上げるのである。もっとも同書に、「又、作能としてさらに本説もなき事を新作にして、名所・旧跡の縁に作りなして、一座見風の曲感をなす事あり。」とも言っているが、本説のある種に基くことが本体とされる。咸陽宮は、能本作者註文・二百十番謡目録共に作者不明の中に入っている、世阿弥作説もあるようであるが確かではない。いわゆる種は平家物語の巻第五、咸陽宮の篇によつていて、割によくまとまっていますので煩をいとわず、平家と謡曲との双方を掲げて、見て貰うことにする。

先ず平家物語の分を記す。

又異国に先蹤を問ふに、燕の太子丹、秦の始皇帝に囚はれて、戒を蒙る事十二年。或時燕丹涙を流いて、我れ故郷に老母あり。暇を賜はつて、今一度彼を見んとぞ歎きける。始皇帝あざ笑つて、汝に暇賜ばんこと、馬に角生ひ、鳥の頭の白くならんを待つべきなりとぞ宣ひける。

燕丹、天に仰ぎ地に伏して、願くは、馬に角生ひ鳥の頭白くなしたへ、本国へ還つて、今一度母を見んとぞ祈りける。彼の妙音菩薩は、靈山浄土に詣して不孝の輩を戒め、孔子・顔回は、支那震旦に出でて、忠孝の道を始め給ふ。冥頭の三宝、孝行の志を憐み給ふ事なれば、馬に角生ひて宮中に来り、鳥の頭白くなつて庭前の木に栖めりけり。始皇帝、鳥頭馬角の変に驚き、論言返らざる事を深う信じて、太子丹を宥めつゝ、本国へこそ返されけれ。始皇は後悔し給ひて、秦の国と燕の国の境に、楚国といふ国あり、大なる河流れたり。彼の河に渡せる橋を、楚国の橋と言へり。始皇、先に官軍を遣して、燕丹が渡らん時、河中の橋を踏まば落つる様に認めて、渡されたりければ、何かはよかるべき、真中にて落入りぬ。されども、水にはちつとも溺れず、平地を行くが如くにて、向の岸にぞ着きにける。燕丹こは如何にと思ひて、後を顧みたりければ、亀どもが幾らと云ふ数を知らず、水の上に浮れ来て、甲を双べて其の上を通しける。これも孝行の志を、冥頭の憐み給ふによつてなり。燕丹なほ恨みを含んで、始皇帝に随はず。始皇官軍を遣して、燕丹を滅さんとす。

燕丹、大に恐れ慄いて、荆軻と云ふ兵を語らうて大臣になす。荆軻

又田光先生と云ふ兵を語らふに、先生申しけるは、君は、此の身が若う壮なつし事を知し召して、かくは憑み仰せらるゝか、騏驎は千里を飛ぶと雖も、老いぬれば驚馬にも劣れり。此の身は年老いて、如何にも叶ひ候ふまじ。詮する所、よき兵を語つてこそ參らせめと申しければ、荆軻、あなかしこ、此の事披露すなど云ふ。先生聞いて、此のと漏れぬるものならば、我れ先づさきに疑はれなんぞ。人に疑はれぬるに過ぎたる恥こそなけれとて、荆軻が門前なる李の木に、頭を突當て打碎いてぞ、死にける。

又樊於期と云ふ兵あり。これは秦の国の者なりしが、始皇の爲に父・伯叔・兄弟亡ぼされて、燕の国に逃げ籠りぬ。始皇、四海に宣旨をなし下し、燕の指図並びに樊於期が首を持って参りたらんずる者に、五百斤の金を与へんと披露せらる。荆軻、樊於期が許に行いて、我れ聞く、汝が首五百斤の金に報ぜられたんなり。汝が首我れにかせ。取つて始皇帝に奉らん。悦びて歡覧を経られん時、劍を抜いて胸を刺さんは、易かりなんと云ひければ、樊於期、跳り上り、大息ついて申しけるは、我れ、父・伯叔・兄弟を、始皇帝に亡ぼされて、夜昼これを思ふに、骨髄に徹つて忍び難し。まことに始皇帝討つべからんに於ては、我が首与へん事、塵芥よりも安しとて、自ら首を切つてぞ死にける。

又秦舞陽と云ふ兵あり。これも秦の国の者なりしが、十三の年敵を討つて、燕の国へ逃げ籠りぬ。彼が笑んで向ふ時は、稚子も抱かれ、又嘖つて向ふ時は、大の男も絶入す。双なき兵なり。荆軻、彼を語らつて、秦の都の案内者に具して行くに、ある片山里に宿したりける夜、其の辺近き里に管絃をすを聞いて、調子を以て本意の事を占ふに、

敵の方は水なり、我が方は火なり。白虹日を貫いて通らず、我が本意遂げん事、あり難しとぞ申しける。

さる程に天も明けぬ。されども帰るべき道にあらねば、秦の都咸陽宮に至りぬ。燕の指図並びに樊於期が首、持つて参つたる由を奏聞す、臣下を以て請取らんとし給へば、全く人伝には参らせじ、直に奉らんと奏する間、さらばとて、節会の儀を調へて、燕の使を召されけり。咸陽宮は、都の廻一万八千三百八十里に積れり。内裏をば、地より三里高く築上げて、其の上にて建てられたる。長生殿あり、不老門あり金を以て日を作り、銀を以て月を作れり。真珠の砂、瑠璃の砂、金の砂を布き充てり。四方には鉄の築地を、高さ四十丈に築上げて、殿の上にも、同じう鉄の網をぞ張つたりける。これは冥途の使を入れじとなり。秋は田の面の鷹、春は越路へ帰るにも、飛行自在の障ありとて、築地には鷹門と名づけて、鉄の門を開けてぞ通されける。其の中に阿房殿とて、始皇の、常は行幸なつて政道行はせ給ふ殿あり。東西へ九町、南北へ五町、高さは三十六丈なり。上をば瑠璃の瓦を以て葺き、下には金銀を登けり。大床の下には、五丈の帷を立てたれども、なほ及ばぬ程なり。

荆軻は燕の指図を持ち、秦舞陽は、樊於期が首を持って、珠の階を半ばかり登り上りけるが、余りに内裏の影しきを見て、秦舞陽慄々と振ひければ、臣下これを奇んで、刑人をば君の傍に置かず、君子は刑人に近かず、近づけば則ち死を軽んずる道なりと云へり。荆軻、立帰つて、舞陽全く謀叛の心なし。只田舎の陋しきにのみ習つて、かゝる皇居に馴れざるが故に、心迷惑すと云ひければ、其の時臣下皆静まりぬ。仍つて王に近づき奉り、燕の指図並びに樊於期が首を見参り入るゝ処

に、指図の入つたる櫃の底に、氷の様な剣のありけるを始皇帝、御覽じて、やがて送げんとし給へば、荆柯御袖をむすずと引かへ奉り、剣を胸に差し当てたり。今はかうとぞ見えたりける。数万の軍旅は、庭上に袖を聯ぬと雖も、救はんとするに力なし。只此の君逆臣に犯されさせ給はん事をのみ、歎き悲しみ合へりけり。

始皇帝、我れに暫時の暇を得させよ。后の琴の音を、今一度聞かんと宜へば、荆柯暫しは犯しも奉らず。始皇帝は三千人の后を持ち給へり。其の中に花陽夫人とて、双なき琴の上手おはしき。凡そ、此の後の琴の音を聞けば、猛き武士の怒れる心も柔き、飛ぶ鳥も地に落ち、草木も揺ぐばかりなり。況んや、今を限りの暇間に供へんと、泣く泣く弾き給へば、さこそは面白かりけり。荆柯、首を低れ、耳を敬て、殆ど謀臣の心も緩みけり。其の時后始めて更に一曲を奏す。七尺の屏風は高くとも躍らばなどか越えざらん。一条の羅敷は動くとも、曳かばなどか絶えざらんとぞ弾き給ふ。荆柯はこれ聞き知らず。始皇帝は聞き知りて、御袖を引断つて、七尺の屏風を躍り越え、銅の柱の陰へ、逃げ隠れさせ給ひけり。其の時荆柯怒つて、剣を投げ懸け奉る。折節御前に番の医師の候ひけるが、剣に薬の囊を投げ合せたり。剣、薬の囊を投げられながら、口六尺の銅の柱を、半までこそ截つたりけれ。荆柯又剣も持たざれば、続いても投げず。王、立帰つて御剣を召寄せ、荆柯を八裂にこそし給ひけれ。秦舞陽も討たれぬ。やがて官軍を遣して、燕丹をも亡ぼさる。蒼天有し給はねば、白虹日を貫いて通らず、秦の始皇は遁れて、燕丹終に亡びにけり。されば、今の頼朝もさこそあらんずらめと色代申す人々もありけるとかや。(武蔵野書院発行、野村宗朗校註、平家物語による。)

次に謡曲の咸陽宮の文を掲げる。但し宝生流による。

シテ<sup>レ</sup>抑も此の咸陽宮と申すは、都の廻り一万八千三百余里。ワキ<sup>レ</sup>内裏は地より三里高く、雲を渡きて築き上げて、鉄の築地方四十里。

シテ<sup>レ</sup>又は高さも百余丈。雲路を渡るかりがねも、雁門なくては過ぎがたし。ワキ<sup>レ</sup>帝の御殿は阿房宮。銅の柱三十六丈。シテ<sup>レ</sup>東西九町。ワキ<sup>レ</sup>南北五町。シテ<sup>レ</sup>五丈の轍鉞。ワキ<sup>レ</sup>竜車の雲居。

シテ<sup>レ</sup>さながら天に飄り、其<sup>レ</sup>登れば玉の階の、金銀を磨きて輝けり。唯日月の影をふみ、蒼天を渡る心地して、各肝を消すとかや。各肝を消すとかやワキ<sup>レ</sup>思ひ立つ、朝の雲の旅衣。落葉重なる風かな。

ワキ<sup>レ</sup>山遠うしては、雲行客の跡を埋み、松高うしては、風旅人の夢を破る。ワキ<sup>レ</sup>たとひ轍門は高くとも、<sup>秦舞陽</sup>思ひの末は、ワキ<sup>レ</sup>石に立つ<sup>秦舞陽</sup>遠山の雲に日をかさね、漸々行けば名も高き、

咸陽宮に着きにけり。咸陽宮に着きにけり。ワキ<sup>レ</sup>急ぎ候程に、咸陽宮に着きて候。まづ<sup>レ</sup>奏聞申さうするにて候。いかに奏聞申し候。燕の国の傍に、荆柯秦舞陽と申す兩人の者、高札の表にまかせ、

燕の指図の箱、並びに樊於期が頭を持ちて、これまで参内申し候。シカ<sup>レ</sup>ワキ<sup>レ</sup>急ぎ庭上まで参内させ候へ。シカ<sup>レ</sup>ワキ<sup>レ</sup>荆柯は佩劍を解いて威儀をなし、節会の儀式に随つて、雲上遙かに見渡せば、<sup>秦舞陽</sup>金銀珠玉の御階を踏み、三里が間を登り行けば、ワキ<sup>レ</sup>

薄水を踏む心地して、荆柯は既に登れども、<sup>秦舞陽</sup>跡に立ちたる秦舞陽、身体わななき手をおして、登りかねてぞやすらひける。ワキ<sup>レ</sup>

ああ不覚なりとよ、秦舞陽。燕の賤しき住居に働つて、玉殿を踏む恐るしさに、應じて上りかねけるか。<sup>秦舞陽</sup>それをなさのみ諫め給ひ

そ。其の磔磔に習つて、玉淵を窺はざるは、驪竜の蟠る所を知らず。地へげに理りとて、典獄は、さしも厳しき禁中に、轅門を解いて、許しけり。轅門を解いて、許しけり。ワキツレへ帝はこれを聞き召し、臨時の節会を執り行ひ、燕使の参内を待ち給ふ。ワキへ舞陽荆軻は大床の、風従に参着申しけり。秦舞陽へまづ秦舞陽進みよつて、樊於期が頭を、皇帝の上覽に供へ、立ち退けば、ワキツレへ帝は笑める御気色。御心も解けて見え給ふ。ワキへ其の時荆軻進みよつて、燕の指図の箱を開き、上覽に供へ、立ち退けば、シテへ不思議やな、箱の底に劍のかげ、氷の如く見えければ、既に立ち去り給はんとす。地へ荆軻は期したる事なれば、御衣の袖にむんずとすがつて、劍を御胸にさしあて奉りけり。ツレへ浅ましや聖人人にまみえずとは、今此の時にてありけるぞや。あら浅ましの御事やな。シテへいかに荆軻、秦舞陽も慥かに聞け。我三千人の后を持つ。其の中に花陽夫人とて、並びなき琴の上手あり。されば毎日怠る事なし。然れども今日は汝等が参内により、未だ彼の琴の音を聞かず。殊更今は最期なれば、片時の暇をくれよ。彼の琴の音を聞いて、黄泉の道をも免かれようと思ふは如何に。ワキへさて秦舞陽何とあるべきぞ。秦舞陽へこれ程まで手ごめ申す上は、片時の御暇ならば参らせられ候へ。ワキへさらば片時の御暇を参らせうずるにて候。シテへ如何に花陽夫人。急ぎ秘曲を奏し給へ。ツレへさらば秘曲を奏すべし。もとより妙なる琴の音に飛ぶ鳥も地に落ち武士も、和らぐ程の秘曲なれば、ましてや今はの玉の緒琴。さこそは御手もつくされけめ。地へ花の春の琴曲は花風楽に柳花苑。柳花苑の鶯は、同じ曲の囀り。月の前の調めは、夜寒を告ぐる秋風。雲居に渡れるかりがね、琴柱に落つる声々も、涙の露の玉章。たまさかに、たまさか

に、人はよもしら糸の、調めを改めて、君聞けや、君聞けや。七尺の屏風は、躍らば越えつべし。羅敷の袂をも、引かばなどかきれざらん。謀臣は有無に酔へり。群臣は、聖人の御助けと、押し返し、押し返し、二三遍の琴の音を、君は聞き召さるれども、荆軻は聞き知らず、唯緩々と侵されて、眠れるが如くなり。時移る時移ると、秘曲度々重れば、シテへ荆軻が控へたる、地へ御衣の袖を引つ切つて、屏風を躍り越え、電光の激するよそほひ、叢のしら玉、盤に落ちて、欄干を走る心地して、銅の御柱に立ちかくれさせ給ひしかば、ワキへ荆軻は怒りをなして、地へ劍を帝に投げ奉れば、劍は柱にとまりけり。シテへ帝また劍を抜いて、地へ帝また劍を抜いて、荆軻をも秦舞陽をも、八つぎきにさき給ひ、忽ちに失ひおはしまし、其の後燕丹太子をも、程なく亡し、秦の御代、万歳を保ち給ふ事、唯これ後の琴の秘曲。ありがたかりけるためしかな。

一体、この平家の咸陽宮は史記の刺客列伝の荆軻伝によつたものであるが、史記の方では、燕丹が秦を亡す事について、田光を語らつたところ、田光は己れの衰老を告げ、荆軻を推薦する。その時、丹は秦を討つ事は国の一大事故、他に洩らさぬように懇望する。田光笑つて承諾し、荆軻に丹の意を伝え、丹が自分に他に洩らすなと言ふは、己れを疑う故であり、君子が行う事について人に疑われるのは、節俠ある者と言えないと、自殺して密事を洩らさぬ事を明らかにしたとあるのを、平家では、荆軻が田光に他に洩らさぬよう乞うた事になつてゐる。荆軻が始皇帝を討とうとして、劍を投げつけるあたりは、史記の本文の方が非常に力強く書かれてゐるが、他の点では、平家の方が要領よくまとめられておる。花陽夫人の琴を聞くことは史記の本文に

なく、史記評林の注に、「正義曰。燕丹子云。左手搯其臂。秦王曰。今日之事。從子計耳。乞聽琴而死。召姬人一鼓琴。琴声曰。羅敷單衣。可裂而絶。八尺屏風。可超而越。鹿盧之劍。可負而拔。王於是辱袖超屏風走之。」(漢文大系本による。)とあるによつてゐる。

平家の文も実によく書かれてゐるが、謡曲の方が更に劇的に簡潔に力強くまとめられてゐると思ふ。能では、登場人物は、シテ(始皇帝)・シテヅレ(一人は花陽夫人、他に侍女二人以上)・ワキ(刑軻)・ワキヅレ(秦舞陽及び大臣三人)外に間狂言(官人)と大変賑やかである。全体的に動きの少ないものであるが、終の方の、「御衣の袖を引つ切つて」から一寸激しい活劇を見せ、謡の文句がその節付と相俟つて劇的な面を生かせる。最後の結びなど特に緩みがない。

以下この能の動きや語句の注釈を記すことにする。

○最初に、後見が、一畳台に白布で巻いた柱を立て、屋根を緞子で覆うた大屋台(宮殿の意)を大小前(大鼓と小鼓の座席の前)に持ち出す。台の上の敷物の下に剣を隠してある。次に囃子方(笛・小鼓・大鼓・太鼓)が幕から出て来る。同時に切戸口から地謡方(普通八人)が出て、それぞれの座につく。間もなく狂言(官人)が出て、燕の国の指図の箱並びに樊於期的首を持つて来る者には、何事でも望を叶える旨を触れる。これを狂言口開という。次いで真の来序という囃子が始まり、シテが唐風の王者の装束で、シテヅレの花陽夫人と侍女二人以上を従え、更にその後、ワキヅレ(大臣)三人を従えて出、シテは床几にかゝり、(床几を用いず平臥することもある。)シテヅレ達は脇座の方に、ワキヅレ達は脇正面に並び向ひ合つて下に居る。(片膝ついて坐ることを下に居るといふ。)真の来序の囃子が終ると、シテ謡

い出す。

○咸陽宮 普通秦始皇帝が建設したと言われているが、秦の孝公が咸陽の都を定め、高大な棧門を設け、始皇帝が更に増大したのである。

史記秦本紀孝公の条に、「十二年作爲咸陽、築冀闕。秦徙都之。」

秦始皇本紀に、「三十四年(中略)始皇置酒咸陽宮。」又「三十五年(中略)

始皇以爲咸陽人多、先王之宮廷小。吾聞周文王都豐、武王都鎬。鎬之間、帝王之都也。乃宮作朝宮渭南上林苑中。先作前殿阿房、東西

五百步、南北五十丈。上可坐三萬人、下可建五丈旗。周馳爲閣

道、自殿下直抵南山、表南山之顛、以爲闕。爲復道、自阿房一渡、

渭、屬之咸陽、以象天極閣道絕漢抵宮室也。阿房宮未成。成欲更

更斥令名、名之。作宮阿房、故天下謂之阿房宮。(下略)(史記國字

解本による。)平家や謡曲の咸陽宮・阿房殿のことはこれ等によつて作

爲したものと思われる。但し刑軻の事は秦始皇本紀には「二十年、燕

太子丹、患秦兵至、因恐使刑軻刺秦王。秦王覺之、休解軻、以

徇。(史記國字解による。)とあり、阿房殿造宮は十五年後の事である。

○雁門 平家本文に説明がある。元來は北陝の西、塞北に通ずる山名

に基づいたものであらう。

○「雁門なくて過ぎがたし」の次、親世流では、地へ内に三十六宮

あり。真珠の砂、瑠璃の砂、黄金の砂を地には敷きシテ、長生不老の日月

まで、甕を並べて夥しの文句がある。

○三十六宮 秦始皇本紀前記の続に、「関中計宮三百、関外四百余。」

とあるが三十六宮のことは見えていない。

○長生不老の日月まで平家の本文参照。

○阿房宮 宝生はアホウキウ。親世はアボウキウ。

○銅の柱 三十六丈、謡曲大観に、城方本には「口六尺の銅の柱を高さ三十六丈に立てさせ」とあると記されている。

○幟鉦 ハタボコ。観世は幟子の字を用い、ハタボコと読む。旗をつけた鉦。普通のものゝは雅楽などに用いる。

○龍車の雲居 龍車は天子の乗る車であるが、龍の駕する車が雲中を走るように、幟鉦が空中に懸つてゐるという意。

○輝けり 輝くは謡ではカカヤクと清音に読む。字鏡に灼灼、加加也久。

○「各肝を消すとかや」の後一セイという囃子があり、ワキ(荆軻)とワキヅレ(秦舞陽)側次という武者の姿を象徴したものを着て、橋懸で向い合つて「思ひ立つ」の謡を謡う。

○思ひ立つ云々 立つは思ひ立つと朝の雲が立つと上下にかかる。朝雲の立つ時、旅衣を身につけ旅に出ると、嵐が吹いて衣に落葉が重つて落ちて来るといふ意。

○山遠うしては云々 和漢朗詠集に、  
山遠雲理<sup>山遠雲理</sup>行客<sup>行客</sup>跡<sup>跡</sup>、  
松寒風破<sup>松寒風破</sup>旅人<sup>旅人</sup>夢<sup>夢</sup>。  
紀實名

旅人が山の方へ遠ざかると雲が跡をかくし、松風の寒さにその旅人は夜の夢を破られることだろ。

○轅門 エンモン、戦陣で車の轅と轅を向き合わせ門とすること。こは宮城の警備がどんなにきびしくてもの意。

○思ひの末は石に立つ 志強ければ望みを達するにいう。諺に、思ふ念力岩をも通す。史記、李將軍列伝に「広出鎗。見ニ草中石、以為<sup>以為</sup>虎而射<sup>而射</sup>之。中<sup>中</sup>石没<sup>石没</sup>鏃<sup>鏃</sup>。視<sup>視</sup>之石也。因復更射<sup>因復更射</sup>之。終不能<sup>終不能</sup>復入<sup>復入</sup>石也。」(史記国字解による)広は李広の事。

○やたけの心 やは石に立つ矢と、やたけ心のやとにかかるといふ。やたけ

心は弥猛心又は矢猛心とかく。いよいよたけく強い心。

○遠山の雲に 遠山にかかる雲路をしのいで、遠い旅をつづけて。遠山はエンザンと音読にする。謡曲大観に、志の通るといふ意にかけて「とは、やま」と謡ったのを後世「えんざん」と音読したのであるとあるが、或は初めからエンザンと謡い、字面で訓のトオをきかせた一種の修辭的的技巧ではないだろうか。「熊野」に「老の鶯逢ふ事も」なども「うぐいす」の字音オウをきかせて「逢ふ」と続けてゐるように思う。「隅田川」の「親と子の四鳥の別れ」も子の音のシを次の四鳥に含ませているかと思う。こういう例は外にも見られる。近松の冥途の飛脚に、「氣に染み付きし妓が事、米屋町まで歩み来て」などの「妓」と「米」は字訓の場合であるが、同様の筆法で近松には殊に多い。

○秦舞陽 宝生はシンブヨオ、観世はシンブヨオ。

○「これまで参内申して候」の次にシカ／＼とあるのは、間の狂言の言葉があるのを、謡本には載せないで、シカ／＼とすることになつてゐるのである。尤も観世流の謡本には狂言の詞を載せてあるところもある。ここで狂言(官人)はワキの詞をワキヅレ(大臣)に取り次ぎ、ワキヅレは「急ぎ庭上まで参内させ候へ」と命じ、狂言はその旨をワキに伝え、ワキの荆軻は佩剣を解いての謡となる。但し素謡では、宝生はワキの「急ぎ候程に咸陽宮に着きて候」から、ワキヅレの「急ぎ庭上まで参内させ候へ」までは謡わない。

又観世では「これまで参内申して候」シカ／＼の後次の文句がある。

大臣「何と申すぞ。燕の国の民に荆軻秦舞陽と申す兩人の者、燕の指図の箱、並に樊於期が頭を持ちて参内したると申すか。かゝるめ



子に随行すること。又、そのもの。御供。供奉。」とある通り、随行・御供の意で、ここはそれでは意が通じない。扈從も胡床もコショオと発音するので、恐らく胡床と書くのを誤ったものであろう。現に観世の謡本は胡床とある。胡床は床几で、我が国では、陣中・狩場又は庭上儀礼などに用いた折りたたみの出来る腰掛の一種。現に能楽の時、大鼓・小鼓の楽師が使っている。

○上覧 ショオラン。天子の御覧。

○期したる ゴシタル。予期した。

○「劍を御胸にさしあて奉りけり」で、ワキと奏舞脚とが左右から台に上り、シテの袖を捉え、ワキは台上に置いてあつた劍をシテの胸先にさしあてる。

○聖人人にまみえず 聖人は素性の知れぬ者に会わない。平家では、「君子は刑人に近づかず」とある。公羊伝襄公二十九年に、「君子不近刑人、近刑人、則輕死道也」(御橋惠言の平家物語略解による。)左氏会箋、襄公二十有九年の「闞私、呉子余祭」の注に「伝云。呉人伐越。(中略)呉子余祭親舟。闞以刀弑之。此釈経所以書闞也。君子不近刑人、呉子朝俘為闞。而闞以刀弑之。是其近刑人也甚。(下略)などある。史記、李斯列伝に趙高が秦の二世皇帝に説いた言葉に、「乃説二世曰。天子所以貴者。但以聞聲。羣臣莫得見其面。故号曰朕。」云々とある。

○花陽夫人 カヨオブニン。観世本にはクワウブニンと振仮名がしてある。謡曲大観に、この名、史記等他の諸書に見えないとし、他の注釈書にも記さないようだが、史記に、華陽夫人の名が見え、秦の孝文王の後である。この名を借用したものと思う。華は花の古字であ

る。史記、呂不韋列伝に「安国君有子所甚愛二姫立以為正夫人」号曰「華陽夫人」(漢文大系本による。)安国君は孝文王の事である。孝文王の次が、襄子の莊襄王。莊襄王の子が政即ち始皇帝。(実は呂不韋の子。)

○琴の上手 宝生は「もとより妙なる琴の音」だけコトと読み、他はキンと読む。観世は、「琴曲」と最終の「ただこれ後の琴の秘曲」だけキンと読み、他はすべてコトと読む。

○毎日怠る事なし 毎日その琴を聞いて休んだことがない。

○片時 ヘンシ。暫時。

○黄泉の道をも免かれうずる 黄泉は、死者の行く処。よみじ。冥土。冥途。あのよ。冥土への苦しみを忘れたいの意。

○今はの玉の緒琴 今は最後の命と引く琴の意。「今は」は、最後。「玉の緒」は、魂の緒の義で、命のこと。それを、玉の小琴(玉の如く美しい琴。玉で飾った琴)にかけてある。

○花の春の琴曲 箏曲考卷之一に、次の如く記されている。  
二春の花のきんぎよく、くわふらくにりうくわゑん、りうくわゑんのうぐるすは、おなじきよくをさへづる。

和風楽、柳花苑みな雙調の曲なり。源順の倭名鈔に出。  
此唱歌は源氏物語花の宴の巻に、

二月廿日あまり南殿の桜の宴させ給ふ。やうやう入日になる程に、春の鶯囀るといふ舞いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀の折おぼし出られて、春宮かさしたまはせて、せちにせめのたまはするに、のがれがたくて、たちてのどかに袖をかへす所を、ひとおれけしきばかり舞給へるに、似るべきものなく見ゆ。頭の中將いづらをそしとあれば、りうくわゑんといふ

舞を、これは今すこしうちずぐして、かゝることもやと心づか怨ねひやしけん、いとおもしろければ、御衣カゴたまはりて、いとめづらしき事に人もへり。

とあるを取て作れるなり。舞の折ふし柳花の苑にて鶯のさへづり柳花苑春鶯囀の楽に相和して、をのづから名にも応じて面白しといふ心にて、同じ曲をさへづるといへり。

三月のまへのしらべは、よさむをつぐる秋風、雲井のかりがねは、こちと柱におつるこゑ。

是秋の夜月に対して箏をしらぶる夜さむの風もとづれ、空とぶ雁の声もおち、清風明月鳴雁セイフメイゲツナリ箏ソウともにさへわたれる夜、興をのべたる唱歌なり。(下略)(高野辰之、日本歌謡集成巻八による。うぐるす・をのづから・をとづれ等原文のまま。)

右の文にも見えては、このあたり、謡曲本文の大意は、花時の春の琴曲としては、和風楽に柳花苑や春鶯囀があり、秋の月の時節のものとしては、秋風楽がある。折柄秋風の吹く時、雲空を渡る雁の鳴く音は、琴曲の響に添うて物悲しく露の涙を落し、遠方からの便を知らせるようであるの意。

○花風楽は正しくは和風楽。宝生・観世共に花風楽となつてゐる。体源鈔二ノ上、九六頁(日本古典全集本)に、「和風楽又名弄春楽舞絶景

但光時記云 尾張浜主國王ノ御前ニシテ和風楽ヲ舞哥ヲ詠スルコトアリ庭ニ錦ヲシキ身ニ五色ノ玉ヲカザリテ舞之庭に玉コボレ落ト云々又云、深草ノ天皇ハ御心聰明ニヲハシマシテ文談クラキ所ナクヲハシマス、(中略)浜主内ニ參テ帝王ノ御前ニテ和風長寿楽トイフ舞ヲ舞フ、(下略)とある。

○柳花苑 前記体源鈔八三頁に、柳花苑、新楽(中略)本者柳花怨云而天曆内宴之日有儀定とある。被下字宛字定置云々

○柳花苑の鶯は同じ曲の囀 初に花の春ハナノハルといひ、柳花苑の鶯(柳花の咲ける園に訪れた鶯)は同じ曲の囀をなすといひ、春鶯囀を出す。春鶯囀は体源鈔八六頁に「春鶯囀頭踏拍子十六イハルニシロ謂中序也(下略) 同入破拍子十六謂破也」二七八頁に春鶯囀(中略)会要曰、天長宝寿春鶯囀(下略)など見えてゐる。囀は鶯と同じ。

○月の前の調めは夜寒を告ぐる秋風 調めはとして、秋風とあるので、秋風楽ということが分る。体源鈔一九七頁に「秋風楽中曲新楽」など見えてゐる。調めは、しらべに同じ。おしなめて・おしなべてといふと同様。

○雲居に渡れるかりがね云々 琴柱コトが琴の面に雁行して並べられるのを雁が連行するのと並べて言ひ、琴の音と雁の声をかけて言つてゐる。玉章は手紙、雁札・雁書・雁の使ともいふので書かれてゐる。漢書蘇武伝に、蘇武、武帝の時、匈奴に使すると、匈奴の王、これを降さんと、大窖の中に幽閉して苦しめたが屈せず、昭帝の時匈奴と和親し蘇武を求めた処、詐つて蘇武が死んだと言ふ。漢の使者は、天子上林苑中で狩して雁を獲たが、雁の足に蘇武の手紙がついていて、ある沼沢中に在る旨が記されて居たと言つたので帰ることが出来たといふ故事から起る。蒙求にも蘇武持節の下に書かれてゐる。

漢書蘇武伝「教使者謂单于言天子射上林中得雁足有係用書言武等在某沢中(漢書補注 芸文印書館印行本 列伝二十四 蘇建子武による。)

○たまさかに 玉章の玉と韻を踏んで書いてある。  
○よもしら糸の調め 人はよも知らじを白糸にかけた。白糸の使つて

ある琴の調べと続いている。人は気がつくまいから、琴の曲を改めて申すことを聞きたまえの意。

○七尺の屏風は 高い七尺の屏風も飛べば越えられよう。屏風はびょうぶ。宝生はヘイフ、親世はヘイフウと読む。七尺は宝生、親世ともにシツセキと読む。但し、節の關係で宝生はシューツセキのように讀う。

○羅穀 ラコク。うすぎぬとあやぎぬ。謡本に羅穀とあるは誤。

○謀臣は有無に酔へり ボオシンナウンニエリ。謀臣は謀計を立てる臣。智謀にたけた臣。(大辞典) 荆軻・秦舞陽をさす。有無に酔へりは、ものの有無もわきまえぬほど妙薬に酔うているの意。

○群臣は聖人の御助け 御側に居る群臣達は天子を救わんとしている。「群臣」はクンシンナと謡う。「御助け」までは琴歌に準えて帝に知らせている。

○二三遍 シサンベン。親世流も同様。但し二三返と書いてある。

○緩々 カンカン。ゆるゆる。心をゆるめ、うつらうつらとしているさま。

○侵されて 心が麻痺して。感覚を失って。

○電光の激しる云々 電光がひらめくように、霞が盤(皿又は盆の類)に飛び散るように。欄干を走るは霞が盤から欄干に飛び散るのと、帝が欄干を飛び走るとの両方にかけている。霞の白玉盤に落ちては、白楽天の琵琶行の詩句、「大珠小珠落玉盤」を含んで書いている。

○銅の御柱 謡曲大観には「御柱」にみはしらと振仮名がしてあるが、宝生・親世ともオンハシラと読む。

○「御衣の袖を引切つて」で、シテ捉えられている袖をふりはらい、

立ち上って台を飛び下り逃げるのを、荆軻等も台を飛び下り、一寸立ち廻りを見せ、シテ袖で頭をおおい後見座に行き、後見から剣を受け取る。

○「剣を帝に投げ奉れば」の次、親世は「番の医師は、薬の袋を剣に合せて投げ止めければ」となり、帝又剣を抜いて、」となる。番の医師は当番で御殿に詰めていた医師。剣に合せては剣にうち合せての意。

○万歳 バンゼイ 謡曲では必ずバンゼイと読む。両字を漢音で読むのである。万歳薬の時はバンゼイラク。マンザラクと読む場合もある。「歳」は漢音セイ、呉音サイであるが、上字ガソと捲音であるため濁音になる。謡曲では、熟語の読み方は漢音同士、呉音は呉音同士又はこれに準じて読むことが多い。清香セイキョオ・日月ジツゲツ・ニチガツの類。

○唯これ後の琴の秘曲 全く後の琴の秘曲を奏した功によるの意。

○「帝また剣を抜いて」からシテ見付柱へ出て、敵を切る型をし、ワキ・秦舞陽は殺された心で切戸から入る。「その後蕪丹」のあたりから謡やゝゆるまり、「ためしかな」でシテ留拍子を踏み、シテ・シテツレ・ワキツレの大臣連幕に入り、後見屋台を持ち去り、囃子方・地謡方引つ込む。

○謡は声を合わせて謡いなどする關係で、発音をやかましくいう。宝生は特に嚴重である。右記以外で全体的の発音について略記することとする。

○「威陽宮」は、普通ではカンヨーキユウであるが、謡ではカンニョオキウである。アイウエオ・ワキウエヲ(ワイウエオ)の音の上にンが来る時はすべてナニヌノにうつす。「御殿は」ゴテンナ。「蒼天を」ソ

オチンノ。「轅門は」エンモンナ。「佩剣を」ハイケンノ。「御暇」オンニトマ。普通でも「因縁・天皇」などはインネン・テンノーであるが、謡は極端になつてゐる。

○「樊於期」は普通ハンヨキと読んでゐるが、謡では「ハンエキ」に従い、宝生はハンニエキと謡う。観世は、謡本にはハンネキと記されてゐる。即ち宝生ではエの上になが来る時はニエと謡う。「因縁」もインニエンである。

○「宮」の如きは、普通はキューだが、謡ではキ・ウと読む。「龍車」はリウシヤ「禁中」はキンチュウ。「柳花苑」リウカエン。「九州」キウシウの類。

○日月 シツノムゲツノム 字音の後がツになるものは、口を閉じて、鼻へぬいてゐる。宝生ではノムといい、観世では含という。高札コオサツノムである。もっとも時によつては、字音でも普通にいい、訓の

場合でもノムこともある。大仏供養は、宝生では普通にダイブツクオオである。観世はダイブツクオと謡う。三井寺の「千満」は宝生センミツノム、観世はセンミツクオと同じい。これ等は例外といつてよい。日葡辞書によると、当時実際に発音されていたらしい。

○免かれうずる マヌカリヨオズル「免かる」は今日マヌガルと濁るが、謡曲では必ずマヌカルと清む。普通の辞書も清んでゐる。

○この一篇「咸陽宮」を取り出したのは、筆者が昭和三十一年十月に能舞台で実演したので、その記念を兼ね、文を宝生流にしたのも、筆者の学ぶところによつて少しでも確実を期したためである。原文など引いた仮名・仮名遣などは原文のままにしたが、漢字はやむなく現代のものを用いたところが多い。多忙の際に執筆したので、不十分な点のあることを断つておく。(昭和三十四年二月二十八日)